The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語のような精神 : W.セラーズの類比説に関する一考察
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	年報人間科学. 2000, 21, p. 1-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8605
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語のような精神

――W・セラーズの類比説に関する一考察――

菅野　盾樹

〈要旨〉

心をどのようなものとして概念化するか、身体と心との関係をどのように説明するか。これらの問いを考究する哲学の部門は、ふつう「心の哲学」(philosophy of mind) と呼ばれている。

W・セラーズ (Wilfrid Sellars, 一九一二―一九八九) は、心の哲学に関して早い時期に一種の機能主義を提唱した人物として知られている。本稿の目的は、彼の機能主義を批判的に再構成しつつ、そのメリットと問題点とを明らかにすることにある。

セラーズの機能主義は、理論構成の観点からいえば、機能主義意味論を基礎としている。具体的にいって、セラーズは、いわゆる〈心的状態〉――セラーズの言い方だと〈思考〉――を発話行為のアナロジー (類比) として構成された理論的概念と見なすのである。あたかも、古代のアトミストが、マクロな物体とその振る舞いを〈原子〉という不可視の理論的構成物を言説に導入することによって説明したのと、類比説 (analogy theory of mind) は共通の軌道を走っている。

それゆえ、セラーズの心の類比説＝機能主義の正否は、機能主義意味論の正否にかかっている。本稿の観察ももっぱらこの点に集中する。

筆者は、本稿でおこなった考察の結論として、セラーズの機能主義意味論が多くのメリット (〈指向性〉概念をメンタリズムから救出しうるのはその一つ) をそなえる点を是認しつつも、彼の方法的行動主義が要請する言語観を根本的に更新する必要を強調している。

キーワード

指向性、W・セラーズ、類比説、機能主義、心の哲学

前編の内容＊

1　意味と心――問題の発端
2　意味論的文は指向的である――チザムの主張
3　チザムのメンタリズム
4　意味は関係ではない――セラーズの意味論
5　類比説のあらまし
6　点引用符の記号機能

7　意味理論の三つの柱

意味論的文は、なるほど「記述的情報」を伝達する（だからそれは偽だったり、真だったりする）。だからといって、この種の文はそれを「確言する」（assert）わけではない。セラーズは意味論的文の「独自さ」を成心を離れて受けとめるよう読者に勧める。チザムの手紙に答えて、彼はまたこうも述べている。意味論的文は思考にかかわらせて分析できないし、またそれを何か経験的事象の「記述」とか「説明」と見なすのも――それを「指図」や「正当化」と見なすのが不都合であるように――やはりできない。すなわち、「意味する」（mean）という動詞が作る文脈は、この意味で「独自な談話様式の核」（core of unique mode of discourse）だというのである[28]。

かといって「独自さ」をあげつらうだけでは、意味論的文を理解するために役に立たないことは自明である。チザムに言わせるなら、意味論的文の分析を心的指向性にかかわらせずに完遂できるはずはないのであって、セラーズは単に意味論的カテゴリーの「独自さ」という空疎な言葉で所説を偽装しているにすぎない[29]。

たしかに、セラーズが意味論的文の独自さを強調する趣旨が多少曖昧ではなかろうか。点引用が独自な記号機能を発揮すること、これはすでに私たちの確認事項である。しかし、当該の機能〈示し〉はなにも点引用の専売ではない。それは、泣き顔による悲しみの表出、生地見本などにも共通する記号機能である。これら三者に認められるのは、ある記号（言語要素、泣き顔、布切れ）が別の記号（点引用された言語要素、〈悲しみ〉という名、色や柄の名）の適用される対象であると同時に、当の記号自身を指示する、という構造である。旧世代の研究者が記号の代表作用にのみ注意を払う結果、他の作用を無視し記号の働きを矮小化したのは確かかもしれない。セラーズによる点引用の導入は記号機能に一つの豊かさを与えた。

しかし真の問題は、意味論的文が体系的にどのような振る舞いを示すかを実質的に明らかにすることである。独自なのは点引用の作用ではなく、点引用にこと寄せて構想された意味理論そのものである。私たちには、遺憾ながらいまセラーズの意味理論の全貌を明らかにする用意がないが、少なくとも意味理論への堅固な舗石を据えるための予備的考察だけはすませておこう。当面の考察は以下の三点にわたっている。(1)点引用分析は「分析」ではない。(2)意味論的文は「記述」ではない。(3)指向性は「特性」ではない。順次その内容を見ていくことにしよう。

(1)点引用分析は「分析」ではない。

チザムは対立者セラーズに次の主張を帰している。つまり、思考の意味機能（meaning）は言語のそれにより分析できる、この逆は成り立たない、という主張である。チザムにすれば、言語的指向性は心的指向性に基づくのであるから、心的指向性をリアルなものとは考えないセラーズは、要するに、心的指向性を言語的指向性へ還元しているとしか映らない[30]。だが意外なことに、当のセラーズはこうした解釈を甘受する素振りさえ見せないのだ。そんなことを私は絶えて言ったことはないし、もちろん逆に、言語的指向性が心的指向性によって分析されるなどと、一度も称したことはない。この種の発想をおこなうのは実はチザムその人である。彼は自ら作り出した幻影に翻弄されているにすぎない……。こうした趣旨のことをセラーズは述べている[31]。

どちらの言い分がもっともなのだろうか。紛らわしいのは「分析」という言葉である。ある主題に関して何か理屈を立てて論じることをすべて「分析」という語で一括するのはいささか乱暴であろう。幸いセラーズは、チザムの言葉遣いを念頭に「分析」について説明している。XによってYを分析するという事態は、Xの概念を有する者がつねにYの概念をもつという事態を意味する（もちろん逆は成り立たない。二つの概念をもつからといって、一方が他方により分析されるとは限らない）。この場合、論理的次元に即していうなら、被分析項Yと分析項Xとは意味が同じ、つまり同義（synonymous）でなくてはならない。また実在の次元に即していうと、Yが代表する存在者とXがそうする存在者に差し引き過不足があってはならない。この種の分析は前の点では理想的な「翻訳」に似ているし、後の点で「還元」をおこなう分析だといえるだろう。テキストを読み返してみると、たしかにセラーズもこの意味で「分析」を云々した箇所がある。ただしそれは、古典的な意味論的文の「分析」を彼が拒んでいる箇所なのである[32]。

意味論的文の「分析」はメンタリストに対して拒まれただけではない。セラーズはそれを行動主義者――彼が「スキュラに呑み込まれし者」と呼ぶ人々――にもきっぱりと拒絶している。換言すれば、「意味する」をはじめ一連の言語表現を行動とその性向によって分析するのは不可能である[33]。点引用の記号論的「独自さ」の一つの眼目がこうして浮上する。心なる実体（あるいはその作用たる心的指向性）と身体（その様態としての行動ないし性向）の二項対立を離れて、人間のリアルなあり方を再考する出立地点（スタート）を大地に刻み込むこと、こうした企図を可能にするものとして、この意味でのみ「意味する」という述語は一種独特（sui generis）であり、反分析のしるしを帯びるかぎり「原始的」（primitive）といわざるを得ないのである。

もちろん意味論的文の独自さをあるべき（悪くいえば独断的）形而上学の高みから演繹するのはフェアではない。点引用の反分析性は要請されるものではなく、事実の中に発見されるべきだ。この点をめぐり、セラーズは意味論的文にまつわる特異な事情を指摘している。彼にいわせるなら、ウィトゲンシュタイン（Wittgenstein）

のあの格率「名辞の意味とはその使用である」は、この場合何の役にも立たない。それというのも、「意味する」の意味を分析するための「使用」(use) など、どこを捜しても見あたらないから、と。

彼のいいたい趣旨は概ね次のようなことである。定義には大別して、明示的なものと文脈によるものとがある。後者はまた「使用上の定義」(definitions in use) とも呼ばれる。この場合、直接あからさまに名辞をほかの名辞により置き換える代わりに、その名辞が生じる文脈から間接的にその意味を規定するのである。たとえば、「平均」という用語はすでにその意味が規定された語だけを遣って定義することができる(明示的定義、explicit definitions)。そうする代わりに、「六歳の男児の平均体重は約二十一キロである」といった文の中で当の語がどのように使用されているかの説明を通じて、その意味を規定することもできる(使用上の定義)。ところで、文脈から意味を囲い込めると同時に明示的にも二重に定義できる「平均」のような語とは異なり、定義の重ね合わせがはなはだ難しい語も少なくはない。とくに論理的な用語はこの点で困難をきわめる。論理学者は「かつ」とか「または」といった論理語に真理値表を用いてただ使用上の定義を与えうるにすぎないし、コプラ(繋辞)としての「ある」が明示的定義を受け付けないことは明らかだ。コプラとはこれこれである、といった途端に定義項にコプラへの言及が紛れ込むからである。「意味する」はこれらの論理的用語に酷似している。談話の中で体系的役割を果たしているくせに、あからさまな定義をつねに滑り抜けてしまう。かといって、それに使用上の定義を附与できるだろうか。「かつ」とか「ある」とかにこの種の定義を適用できるという意味に近い意味においてなら、たしかにそうできるかもしれない。ただし、この定義は明示的意義への切り替えがきかない。その点で分析可能な「使用」を伴わないのだ。

他の言語要素と規則的に結合するという意味では、なるほど「意味する」は固有の使用に囲まれている。にもかかわらず、この規定性を何らかの特性として結晶させることは不可能である。「ある」や「または」は特性(存在性や選言性!)を指示するのだろうか。「英語の beはあるを意味する」から「beが意味する何かがある」を推論することができるように、「meanは意味するを意味する」から「meanが意味するものが存在する」を導くことが可能である。たしかに非の打ち所のない推論だ。しかし、こうした考察の糸に手繰り寄せられた「もの」は、それを「特性」と呼ぼうが呼ぶまいが、およそ何物でもない[34]。

(2)意味論的文は「記述」ではない。

意味に関するチザムの主張には、これまで考察の的にした、思考による分析の体裁をとるもののほかにいくつか別の形態があった。前出のように、「語の意味や使用を記述するのに遣う文は通常指向的である」はその一例である。たとえば文「giantは英語で巨人を意味する」には、巨人がいるともいないとも、そうした存在に関する含意がともなわない。この文の否定形についても同様である。それゆえ彼が開発した指向性の基準で測定すると、この文からは指向性な

る性状が検出される。そして言語的指向性の根拠が心的なそれにあることは自明だから（とチザムは断定する）、意味論的文が言語の意味を「記述する」事実は、「思考」を基本用語に採って分析できるに違いない。しかし、チザムのこの推断を牽引したのは、すでに確認済みの「意味論的文の分析」という当を得ない観念と、分析を遂行するにはただ二つの見地しかないという、彼が自分で背負い込んだ前提である。彼は言葉の意味の解明が思考によりなされるか、あるいは（行動主義的意味あいで）行動によりなされるか、どちらかでしかない、これに第三の抜け道はあり得ないと頭から決めている。とはいえ、他人が彼の敷設した道を追随すべきいわれはない。

他方、セラーズが倦まず明示に努めているのは、古典的二元論からは「第三位」を押しつけられてはいるが、実は二元論の序列に甘んじるはずもないもの、この意味で「独自なもの」（sui generis）、むしろそのままでは可知性を欠く古典的二元論にそれを恵む点で固有の首位を護るもの、こうしたものなのである。しかし当面問題なのは、「意味論的文が記述を行う」というチザムの理解である。

意味への確実なルートを築くために私たちが据える舗石は、またしても否定的なそれだ。セラーズによると、意味論的文は何も記述しないという[35]。「記述」という用語に彼が明示的定義を施している形跡はない。その真意は推し量るほかはないが、セラーズの主旨はおおよそ明らかである。言葉に含ませたり、ほのめかしたり、あらわに展示したりするかわりに、はっきり言葉に出して語るとき、人は記述して（describes）いる。「この林檎は赤い」、「彼は背が高い」などはいずれも記述である。前の文で話し手は、いかにも林檎を食べたそうな口調で暗に林檎を欲しているのかもしれない。しかしこの〈欲求〉は記述されたものではあり得ない（「話し手は林檎を欲している」が〈欲求〉に言及した「記述」であることと比較せよ）。こうした意味で、意味論的文は何も記述しないのである。

しかし事柄が紛糾するのは、チザムが理解する「記述」に問題の文がある点で合致するためである。すなわち、意味論的文は真理値を担うのだ。換言すれば、この文は記述的情報を伝達する。「この林檎は赤い」が話し手の心理について何かを伝達（記述ではない）するように、そのうえ伝達された内容が真や偽でありうるように、意味論的文に内容が伴うかぎりそれは「記述的」である。実際、この点を否定すればセラーズは意味理論構築のあらゆる足場を失うだろう。というのも、もしそうすれば意味論的文が真理値を担うこと自体がリアルな意義を失い、単なる思いなしに変質してしまうから。次にこの点をはっきり見届けておこう。

セラーズは、「意味する」という語の特異な性状を「べし」（ought）に比較して、二つとも選言や否定などの論理語ではない点で「記述的」であると言えば言えないことはなく、と述べている[36]。問題の理解にとって、対象の階型（type）という観点が有用かもしれない[37]。あるものを第0階の階型に置くとする。すると、この対象について記述する語が代表するもの（特性）には一段上の第一階が与えられることになる。たとえばこの花が第0階だとすれば、花の赤さは第一階となる。ところで意味論的語が代表するものは

（もしもそんなものがあるとして）、文の内容の一部でありながら、第一階の特性では決してない。「giantは巨人を意味する」をセラーズは「giantは・巨人・である」と読み変える。すなわち意味論的文の産出は言語要素をその機能に従って分類する行為なのである。

前述のように、それは美術鑑定家がある絵画の作者が誰であるかを割り出す作業に似ている。彼は作品の諸々の特性を子細に調べるだろう。だが作品が特定の作家に帰属するという「特性」は、それらの特性の一つではないし、その絵に描かれているわけでもない。鑑定家になしうるのは、さまざまな絵の特徴を「総合」して判断を導くことにすぎない。問題は個別的な作品の特性の特性、つまり第二階の特性なのである。意味論的文に盛られた「記述的」情報は「意味作用」という特性を指示していない。というのは、土台そうした特性などないからである。にもかかわらず、意味論的文がある意味で「記述的」なのは、この文にともなう事実的特性（いわば文の素材と生地）のお陰である。言うまでもなく、言語要素の機能を支える条件の一つは、この要素がさまざまな事実上の特性をもつということである。たとえばgiantという発語に〈巨人〉印を捺すには、この個別的な発語が他の発語との連関で一定の特徴を有する事実を認識する必要がある。この点については以下でまた触れることになるだろう。

(3)指向性は「特性」ではない。

点引用は分析を意図しない。そもそも意味論的文は記述をともなわない。それというのも、指向性とはチザムが信じるような何か特性といったものではないからだ。こうして私たちは第三の否定的な礎石を足場に据えることになる。この点をめぐり二人の哲学者はしばしば応酬を重ねた。チザムの立場では、指向性が意味論的文の「特性」ではない、と語ることは不条理にすぎない。もし言語に〈指向性〉と呼ばれる性状が具わっていないなら、それを検出する基準を求めて奔命したのは徒労だったのか。そんなはずはない。むろん彼の努力は多とされるべきだろう[38]。真の問題は指向性を「特性」と呼ぶその真意にある。メンタリストたるチザムは、言語的指向性の源泉を思考の作用に求めている。彼は一度ならず天体の比喩をもちだす。――言語は意味を表す。しかし考えてもみよう。紙の上のしるしや物音がそれ自体意味を発揮できるものかどうか。確かに月は闇を照らして光る。けれども太陽がなかったら、月は輝きを失う。太陽なくして月が光らぬように、思考の意味作用がなければ言葉はその徳をすべて失わざるを得ないのである[39]。

言語の意味が思考の意味により分析されるというこの見解は、言語的指向性なる特性は心的指向性を成分として含む、という主張に帰着する。言語が意味するという現象の本来の立役者こそ、心の指向性なる「特性」なのである。なるほど立派なものだし結構な特性だ。しかし私たちの困惑はここに窮まらざるをえない。パットナム(H. Putnam)の指摘するように、たとえそうした特性があるとして、人はそれについて何一つ知らないし、知ることもできない。それは永久に神秘な力にとどまる[40]。古人が言ったように、死と太陽は凝

視できないというわけである。

指向性を「特性」に祭り上げるのは、心をかえって空虚にする仕業である。たとえばデカルト（R. Descartes）。考え、想像し、意欲し、その他あらゆる思考の働きの主体である実体（すなわち〈精神〉mens）は、他方の実体である物体（corpus）とは――それが神の創造物であるという一点を除き――まったく似てはいない。このため精神は高く尊くされ、肉体の崩壊した後の存続の可能性を請け合われる。質料の汚点をきれいに拭われることにより、逆に絶大な権能を授かるというこのからくりは、デカルトが中世から脱け出るために案出した方策の一つである。彼を育んだアリストテレス（Aristoteles）、トマス（Th. Aquinas）の伝統は身体を宿りにこの世界にすむ人間のあり方によほど意を用いていた[41]。もう一人を名指せば、サルトル（J.-P. Sartre）。彼こそ徹底した自覚の上で意識の純化を極北まで推し進めた英雄である。その結果、人間の自己は無に、いや、そう名づけた途端それはすでにもう「無」なる何かに変質せざるを得ないがゆえに、あらゆる意味で「もの」であることの純然たる否定として、ひたむきな「無化」の働きに転身したのである[42]。

特性を摑もうと企てた手が握りしめたものは、もはや名状しがたい力、無化でしかない。この道行きを思いとどまり、出立の地点へもどるべきだ。セラーズの真意はそうした提案にある。類比説の詳細な検討以前の現段階では、心への言及を気安くなすべきではない。しかし、この説では、言語的指向性こそ心解明の鍵なのだから（〈心〉概念は言語的指向性をモデルに構想されたものなのだから）、類比が有意的（relevant）であるかぎり、そうした言及の先取が実は許されているとも言いうる。だが私たちとしては慎重に順序を追いたい。

意味という働きは、古典論者の目には明瞭な「特性」に映る。「意味する」は「蹴る」や「食べる」と同じ他動詞であり、小石を蹴ること、林檎を食べることなどがいずれも人物の（広義の）特性であるように、同類の動詞「意味する」が特性を表すのは明らかではないのか。しかし、彼らの論証はここで行き止まりだ。特性を何か「内的な」標識（第二階の特性）を挙げて指し示すことはできない。指向性とはいわば「特性を欠く特性」である。人は色彩がどのようなものかを、「知る」という語のふつうの意味で知っている。光が射さない場所で色を見ることはできないことや、二色を混合すると違う色が得られることも知っている。また行為がどのようなものかも分かっている。それは、そうしようと欲して生起する何かであり（ただし自分の場合）、それなりの理由がともなう出来事である。ところが指向性はそれが指向性であるという特性以外、捉えどころが一切ない。それを「作用」と呼ぼうと何と呼ぼうと（私たちも慣例に従ってそうしてきたが）、真相が明らかになるわけではない。

8　言葉の肉体

前節で見たように、指向性を内容をともなう。これは、意味論的文が記述的情報を運ぶ事実に対応する点である。指向性は無でも無

内容な神秘な力でもない。こう言えばよいだろうか。指向性は「特性」の資格を諦める代償に、いわば肉体（flesh）を授かるのだ。言葉は化肉の秘蹟にあずかる。意味論的文は言語要素を機能的に類別するというのがセラーズの洞察であった。発話の経験的特性（これを調べるのは言語学の各分野である）がそれぞれに異なるにもかかわらず、giant, Riese, géant, 巨人と、どう語っても同様な意味を表すことができる。言うまでもなく、発話は時空のうちに生起する出来事である（大脳の機能としての〈思考〉も例外ではない）。古典論者が忘れている（忘れているフリをしている）のは、発話がしかじかの語として人の耳朶に触れるという事実である。将棋の駒が大小さまざまな大きさ、形、色、彫り込まれたアイコン、盤上の規定された動き、「成り」という振る舞いなどを、それぞれ具現すること（embodiment）なしに、将棋というゲームができるだろうか。言語というゲームの場合も同様である。言語要素は意味するために「きまった事実上の性格」（determinate factual characters）をともなわざるを得ない[43]。この事態と類比的に、概念の駒で演じられる「概念ゲーム」（conceptual game）においても、それぞれの駒は「きまった事実上の性格」をもたなくてはならない。それゆえ、セラーズによれば、日本語の内的談話（すなわち思考）と英語の内的談話とでは、これら二つの言語の相違を反映する体系的な違いがあることを想定できるという[44]。

古典論者は言葉の肉体に目をふさいでいる。言葉から心的実体が逃れ去れば、残るのは単なる「しるしや物音」にすぎない、と彼らは断言する[45]。こう言わせるのは、しかし、彼らの抱え込んだ「物と心の二元論」にすぎない。単なる物音が意味の力をもたないことはセラーズももとより承知である。問題は言葉という名の物音なのであって、「単なる」物音ではない。古典論者は言語への自然への根ざしを切断し、いったん言語を死へと放逐してから、改めて思考の魂をそこに吹き込むという、念の入った操作に訴える。しかしこの代価は莫大である。以後言語からは固有の可知性が失われ、それは「思考の衣裳」にすぎなくなる。セラーズは言語を物理的事物へ還元することに反対する。それゆえ言語の意味のために、思考なる実体を要請することもしない。言語が意味するとは、さまざまな「事実上の性格」をともなう音声学的出来事が、二元論からは独立な記号システムの媒介によって、これらの事実上の性格の相違にもかかわらず（複数の言語があるからである）、しかし他面でまさしく事実上の性格のゆえに（機能は肉体に宿るからである）、同一の機能を果たすということにほかならない。

ここに露呈した論点を整理しておこう。第一点。しるしや物音は言語使用をおこなう動物が生成した場合にかぎり意味をもつ。オオムの物まねや録音機から再生される音声は、言語として聴取される可能性を保持するものの、それ自体は言語をなさない。セラーズのこの見解は、チザムが疑っているように心的指向性を前提しないだろうか。私たちの答えは明瞭である。そのような「前提」はチザムのものかもしれないが、自分の前提を人に強要する権利は誰にもないはずだ。心的実体と「単なる」物理的存在者の原理的対立を離れ

た、その意味で「独自な」言語の力を認めればそれで充分である。

しかし第二に浮上する論点がある。すなわちセラーズの類比説の詳細については今後の解明を待つという面を否めない。心と物の二元論的に対して中立な機能システムを具体的に解明しなくてはならないし、「独自な」言語の力を明らかにしなくてはならない。この課題はなかばは哲学的でなかばは経験科学的探究という性格をおびるだろう。私たちはセラーズの探究に導かれて、「言葉の肉体」を再発見した。けれども、チザムが棹さす古典主義からの反撃は必至である。なるほど言葉は記述可能な内容なしには働かないかもしれない。それを言葉の「肉体」と呼ぼうがそれは呼ぶ者の随意だ。しかし、言語の経験的諸条件は単に必要条件にすぎない。それだけで言葉に生命が宿るだろうか。換言すれば、それは言語の十分条件か。疑わしいのはこの点である。こうして、古典論者はまた旧態依然たる心的実体を導入するのである。

反撃をかわすには、一つしか道がないように思える。言語の経験的諸条件が、またその十分条件である点を是認すること。換言すると、言語の肉体こそが言語そのものだと言い切ることである。繰り返すことになるが、これは心というものが存在しないなどという無茶な抗弁ではない。むしろ心は古典論の囲い込みから放たれて、いまこそ自由な姿で蘇生するのだ。こうした視角を確保しうることが、類比説の可能性の一つである。

類比説の検討に向けて、まず言語的指向性を精確に定位するという当初の目的は、以上の議論によってほぼ達成できたと思われる。点引用による解明と類比説の眼目は、意味論的文がそれに相応しい意味理論を指し示しているという点にある。譬えていえば、彼の構想は二十世紀の言語探究の根底にある、きわめて重要だがしばしば気づかれない伏流から生命の水を汲んでいる。その潮流とは、記号の代表主義に替わる新たな記号理論である。

旧来の記号観が心身の二元論に深く結びついているのは、誰の目にも明らかだろう。記号はそれ自体としては単なる物理的なものにすぎず、これを人間が何かを表すことを意図して使用することにより初めて記号として機能するにすぎない。こうして、言葉は質料（音、インクのシミ）と質料をもたない〈意味〉とに引き裂かれる。これに対応して、人間も物質としての身体と不可視の精神とに分断される。意味と意味の媒体としての記号との関係は、心と身体の関係に対応する。しかしセラーズの構想は、古典的な心身二元論（特に心的実体を認める点でメンタリズム）と物理主義（あるいは行動主義を含めひろく唯物論）の二者択一とは別の道筋があることを示唆している。意味論的出来事が言語の自己言及性という構造をそなえる点はすでに指摘した。これは正統派の意味理論が多少とも依拠してきた「客観主義」に対する大きな問題提起である[46]。古くはスチュアート・ミル（S. Mill）の、名辞を名（name）とみなす説にしても例外ではない。「ポチ」という名は外界に客観的に存在するイヌの個体ポチを外延指示する（denote）とされる。名の意味とは、抽象的な記号と事物との間に成立する客観的な関係だというのである。また、今世紀の意味論に甚大な影響を与えたフレーゲ（G. Frege）

の概念整理に従うと、言語表現には「意義」(Sinn) と「指示対象」(Bedeutung) の二つがともなうという。意義とは記号を指示対象に結びつける手段であって、記号の意味は、意義を仲立ちに記号が指示対象に関係づけられるという事態のことである。意義も指示対象も人間の理解からは独立に存立しうる客観的なものであり、そのかぎり意味とは客観的な関係だとされるのである。

これにひきかえセラーズの見地からは、意味を言語と言語ではないものとの客観的関係によって規定するという発想が自覚的に拒まれている。「giantが巨人を意味する」ということは、彼によると、「giantは・巨人・である」ということにすぎない。主語が言語表現なら述語もそうなのである。言語の機能の根源に〈類別〉の働きが発見されたということは、意味理論にとって何を物語るのだろうか。意味論的出来事のうち、私たちはただ「意味する」という動詞を問題にしてきたにすぎない。この動詞が構成する文以外にも多種多様な意味論的文がある。また〈意味〉概念は〈真理〉概念と密接に結びついている。さらに意味理論は、唯名論や実念論の対立に象徴されるような存在論上の問題とも絡み合っている。非客観主義に立脚しつつ「もう一つの」意味理論を具体化しようとする私たちの企図にとって、セラーズの業績にはさまざまな手がかりがまだ多く残されている。

9　思考の主観性

ジョーンズ神話は、心的述語が言語的述語の類比物として原始ライル語の中へ導入された一部始終を物語っていた。「心の働き」とか「内面性」といった常識的・前科学的な観念は、そもそも人間の行動を説明するために理論的に形成されたものである——これがセラーズの洞察であった。問題の理論を構成するために採用されたのが、意味論的言説 (semantic discourse) のモデルであった。このモデルを使用して、言語の領域から心の領域へと隠喩的投射がおこなわれたのである。しかし、メンタリストはこうしたやり方には承伏しないだろう。類比説に反対する材料として、メンタリストは個々人が自分の心を「内側から」知ることができるという事実 (いわゆる「内観」) を持ち出すにちがいない。第三者の行動を説明するために心的述語を彼や彼女に帰属させることと、自分が自分の心の状態を知っていること (自己意識をもつということ) とはまったく別個のことである。なるほど類比説は、三人称で記述しうる事態には妥当するかもしれない。しかし、一人称でしか語り得ない意識の事実をこうした見地で説明するのは不可能ではなかろうか。

ところがセラーズは、ここに格別の困難はないという。心的概念は自分にとっても他人にとっても、基本的には同様な資格で適用される。なぜなら、一般に、理論概念には必ず間主観的な理解可能性がともなうはずだからである。たとえば〈電子〉という概念が記述

の人称（person）とどんな関係があるというのだろうか。心的概念も、間主観的に構成されたモデルに基づいて形づくられたものであるかぎり、人称には関与しない。概念そのものの水準で捉えれば、心的なものに人称にかかわる非対称性などありはしないのである。

もちろんセラーズは、心的行為なり心的状態なりが「私的なもの」であり、ただ私だけがいわば内側から私の行為や状態に直接接近できるという特権をもつことを認めている。しかし、この非対称性は、概念そのものの水準ではなく、概念の「使用」の水準に属する。つまりこうなのである。初めに「理論的説明」のために導入された概念が、後になって話し手の心的状態を「報告する役割」（reporting role）を果たすようになる。一人称の人物（主体）が自分の内的な状態に対して特権をもつということは、理論的概念にそうした役割を演じさせる技能を彼や彼女が身につけるにいたったということにすぎない。というより、精確にいえば話は逆で、まさしくそうした技能を獲得したとき、ここに初めて「主体」ないし「主観」が成立したのである[47]。

ではどのようにして個々人はこの技能を身につけるのだろうか。セラーズはこの点に関してジョーンズ神話を次のように続ける。心的な概念図式を創造した私たちの英雄ジョーンズは、彼の仲間たちに、言語は思考の表現であるという「理論」を説き聞かせる。やがて彼らは互いの行動を心的な述語で解釈し言い表すようになる。たとえば、トムがディックのさまざまな振る舞いを証拠にしながら、「ディックはpと考えている（Dick has the thought that *p*）」と発言できるようになるだろう。心的概念が間主観的に構成されたものである以上、トムはこの理論を自分自身にも適用したいと望むかもしれない。ディックが繰り広げた行動のパターンと類似した行動パターンを自分が生成したことを観察したトムは、やはりこの理論に依拠して、「私はpと考えている（I have the thought that *p*）」と語ることができるし、実際にそう語るようになるだろう。もちろんトムの言語能力が陶冶されるためには、仲間たちが懸命に彼を手助けをする必要がある。共同体の成員は、トムが自分のことを語るときには「私」という一人称の代名詞を使用できるように彼を訓練しなくてはならない。また、彼の一人称の発言が証拠に強く支持されている場合には、仲間たちは彼を褒め、反対に証拠が薄弱な発言を彼がすれば、彼を叱ったり不賛成を示したりするだろう。こうした訓練を積むことによって、やがてトムは証拠に基づく一人称の理論的発言をますます確実に、ますます迅速に行えるようになるにちがいない。そして遂には、証拠や推論を介さずに心的概念を使用できるまでになる。すなわち彼は心的概念を「説明」のためにではなく「報告」のために使用する技能を獲得したのだ。いまこそトムは「話す主体」に、したがってまた「思惟する主体」に変身を遂げたのである[48]。

セラーズのこの議論は「主観性」が絶対的ではない点に焦点を絞っている。何か絶対的な内面性や私秘性（privacy）から物語を始めれば、なるほど各人が自分の思考に対して特権的な接近を有するのは自明なことかもしれない。しかし、この自明さの代償はひどく高

価なものにつくだろう。それが悪名高い「他者の存在」の問題でありこれと裏腹の「独在論」という代償である。セラーズはむしろ概念の間主観的な水準から出発して、この水準に「主観性」の独自な次元を構成しようとする。その次第を物語るジョーンズ神話・続編は、実際に首尾を遂げているのだろうか。メンタリストならさだめしこう反論するに違いない。私が自分の心の状態や働きを知る様態は、「迅速で精確な推論」などとは比較にはならない。私は外界の事物を直接（推論を介さずに）知覚することができるが、これと同じで自分の心を直接に覗くことができる。内観（introspection）は否定し得ない心の能力ではないのか、と。

意外なことに、この難詰にセラーズはあえて異を唱えようとはしない。前述のようにセラーズは、人は直接（推論を介さずに）自分の思考を知りうるという特権をもつことを認めている。この意味では思考は理論的存在者ではない。テニスボールが壁にあたって跳ね返るのを、わざわざ力学の法則や証拠をたよりに推論するにはおよばない。それは直に目で見て知られる事態である。こうした知覚と同じように、私たちは折りに触れて（on occasion）自分の思考に関して非推論的な知識を得ることができる。しかし、「思考が理論的存在者ではないのは、それが単なる理論的存在者ではないから、理論的存在者以上のものだからである」[49]。（ちなみに、セラーズがわざわざ「折りに触れて」と断っているのは、私たちがつねに自分の心の状態や働きを知りうるとはかぎらないからである。）

セラーズのやや晦渋なこの言い方の真意を明らかにするには、他の場所でなされた彼の発言を参照する必要がある。ある箇所で、彼は概ね次のように述べている。誰もが自分の思考に直接アクセスできるのは確かである。だがこの「直接的アクセス」を説明するためには、思考を導入した初めの理論的枠組みをほかの枠組みと取り替える必要はない。問題はあくまでも理論的存在者としての思考に追加された役割なのである。この追加によって、思考は単なる理論的存在者以上のものに転化するのだ、と[50]。要するに、他者の心的状態と私の心的状態の非対称性とは、「理論的存在者」と「理論的存在者以上のもの」（theoretical entities plus）との対比に帰着するのである。

10　メタ思考の経験的性格

ここでセラーズの議論を整理しながら新たな論点を補足することにしたい。第一に、思考の主観性は、類比説によって思考に帰属せしめられる特徴からは独立だという論点である。思考概念に追加される「報告する役割」は、この概念そのもの（あるいはこの概念を含む理論）から必然的に派生するわけではない。ジョーンズ神話・続編によれば、思考の主観性は、条件づけられた言語行動の基盤の上に成立する一つの事実であり、事実以上でも以下でもない。形而上学の用語を遣っていいなら、主観性は思考の偶有性（accidentia）であって、その本質（essentia）ではない、ということができる。第二に、メンタリストの唱える「内観」とセラーズが容認する「直

接的アクセス」には、似ているようでありながら、実は見過ごせない重大な相違がある。どちらも推論を介さないという直接性では共通している。しかし、内観の特異な点は、それが「自明性」をそなえるという点である。換言すれば、内観によるものの知り方は、推論、信念、証拠などによる正当化を必要とはしないし、他の何かそうした根拠によって正当化しうるものでもない。むしろ内観は、他の知識の正当化に役割を果たすのである。内観はつねに〈すでに正当化されたもの〉という完了相を帯びて出現すると同時に、〈自ずと正当である〉という自発性をもともなっている。ところで、セラーズから見れば、こうした特色をもつ内観は「所与の神話」――概念に媒介されない赤裸の知、ほかの信念を正当化する、それ自体は自明な知というものがある、この種の知があらゆる知識の基礎をなす、という見解――を物語るものにすぎない。これにひきかえ、直接的アクセスによる報告は、直接的アクセスという契機とは別の根拠によってそれ自身の正当性を保証してやる必要がある[51]。

直接的アクセスの正当性を保証するには、いくつかの条件がいる。第一に、「私はpと考える」という発言は、実際に話し手がそのように考えていることの徴候であること――こうした規則が言語共同体によって広く認知されていることが必要である[52]。言い替えるなら、その発言がまさに話し手の心的状態を報告する行為であることが、社会的に認知されていなくてはならない。この認知がどのように実現されるのか、認知されるこの規則の本性は何なのか。嘘をつく者がいたり、勘違いでそう言う者がいるにもかかわらず、一般にこれが規則と見なされている点からすると、これは経験的一般化なのか、それとも一定の言語ゲームが要請する語用論的アプリオリなのか。こうした疑問がすぐ脳裏に浮かぶが、ここでは問題の詳しい考証は割愛することにして、次の条件に目を転じたい。

さて第二に、話し手自身も上記の条件をわきまえている必要がある。そのために話し手は、少なくとも二つの能力を獲得しなくてはならない。まず話し手は、自分がある思考をもつ際に、この思考に加えて、自分がその思考をもつという思考（メタ思考）をもてるようにならなくてはならない[53]。ジョーンズ神話からすれば、このメタ思考は思考のアプリオリな構造などではなく、それもやはり言語共同体が実施する話し手の訓練の賜物だといわざるを得ない。というのも、メタ思考は思考概念の報告的使用の一側面にすぎないからである。話し手は、彼や彼女において思考が生起したとき、この思考を報告する技能を身につけるよう社会的に訓練されるが、同時にこの思考の生起に対する適切な反応としてのメタ思考をもつように社会的に条件づけられるのである。

言い換えるなら、〈ある思考（a thought that *p*）〉の生起 →「私はpと考える（I have a thought that *p*）」という発言、という因果過程を媒介するのが、〈私はpと考える、という思考（the thought that I have a thought that *p*）〉の生起、すなわちメタ思考の生起なのである。こうして、「私はpと考える」という発言は、私の思考内容を報告すると同時に、この内容に関する私の心的態度（メタ思考）を表出する。これは、たとえば野菜のピーマンを目の前にした「こ

れは緑色だ」という発言が、ある事態（〈このピーマンが緑色であること〉）を報告すると同時に、この事態に関する話し手の態度（〈私はこれが緑色だと信じる〉という信念）を表出するのと類比的である。そして話し手が獲得しなくてはならないもう一つの能力は、〈報告〉という発話行為を他の行為から識別し、同時にこれをメタ言語を遣って特徴づける能力である。つまり、話し手は自分が何をしているのか、自分で分かっている必要がある。ジョーンズ神話からすれば、当然ながら、この能力もまた社会的訓練の所産ということになるだろう。

以上に、思考の主観性に関するセラーズの分析を追ってきたが、問題の全容はまだ明らかにされていない点を率直に認めざるを得ない。理論概念として始まった思考が報告の役割を担うものに転化する、という論点は啓発的である。さらに、思惟する主体の誕生譚としてのジョーンズ神話・後編の興趣はつきない。しかし、転化そのものはどのように実現されるのだろうか。この点セラーズは説明不足ではないだろうか。一人称で思考を報告することは、一面で、個人の言語能力の発達の問題と見なすことができる。人はこの能力をどのようにして発揮するに至るのか。私たちは哲学的な意味理論と経験科学的な心理学とがクロスする領域でこの問題を考究する必要を痛感する。

この課題はたとえば次のような問題とも関連する。セラーズ説では、ある話し手が抱いた思考には必ずメタ思考がともなうとは限らない。思考を報告する行為を妨げるさまざまな要因が働く余地があるからだ。しかし、こうした見地が古典的見地と正面から衝突するのはいうまでもない。古典的な意識の哲学からすれば、思考は必ず自己反射的でなければならない。すなわち、思考は何かについての思考であると同時に、思考する自己についての思考、メタ思考である。前述のように、セラーズは思考概念が報告する役割を果たすようになれば、思考の構造にメタ思考が組み込まれることを認めている。とはいえ、あらゆる思考がメタ思考を要請するわけではない。もしそれが思考の必然性なら、メタ思考も思考であるかぎり、私たちは無限後退に陥ってしまうのではないか[54]。それゆえ、思考がメタ思考を（ある場合にはさらにメタメタ思考を、また場合によってはメタメタメタ思考を……）ともなうのは、あくまでも思考の経験的構造にすぎず、思考そのものの本質には属さない。だとすれば、次に浮上するのは、報告しうる思考とそうはできない思考とを分化せしめる要因は何なのか、どのような機序でこうした分化がもたらされるのか、という問題であろう。

ここで誰しもが想起するのは精神分析の理論であろう。フロイト（S. Freud）は思考（あるいは、記憶、イメージ）の〈抑圧〉という精神作用を説いた。たとえば、ヒステリー患者は、意識にのぼるのが不都合な表象を意識から排除し〈無意識〉の領域へ押し込める。フロイトはこの抑圧のプロセスが無意識を構成すると見なした。無意識とは抑圧された意識である。精神分析とセラーズ説とは両立しないわけではないが、無意識概念についてセラーズは何も述べてはいない。ローゼンタール（Rosenthal）によれば、分化の要因に関し

て類比説に手がかりを求めるとすれば、思考エピソードとそれが生起する傾向性との区別にそれを見出すことができるかもしれない。思考に関する私たちの言説は、その大半が実は〈思考をなす性向(disposition to have thought)〉についてのものなのだ。たとえば、私はこれこれを信じているとか、これこれを考えているとか私は語るが、これらの信念や思考は性向として分析が可能である。性向は定義上潜在的なものである。そのかぎり〈性向〉の概念には証拠に基づく推論が組み込まれている。したがって、非推論的に報告できる思考が一定の範囲に限定されるのはむしろ当然であろう[55]。

11 類比説の将来

ここまでセラーズの類比説を吟味したきた。もちろん類比説に不明瞭な面が残っていないわけではない。しかし、それが致命的な欠陥や一見して明らかな誤謬を含んでいるとは思われない。常識の中に潜んだ私たちの自己理解のからくりを類比説はよく説明していると思えるし、民間心理学(folk psychology)の諸概念に根をおろしながら、しかも心に関する将来の経験科学的探究につながってゆく道筋を確保している点でも、類比説に豊かな可能性を認めたい。にもかかわらず、本稿を終えるにあたり、類比説に対して若干の問題提起を是非ともおこなっておく必要がある。それらが類比説の根幹にかかわる懸案だからである。

類比説の成立の基盤は、言語の領域から心の領域へとなされた隠喩的投射にほかならない。だとすれば、言語の本性をどう捉えるか、この点こそが類比説、あるいはこれに立脚する心の哲学にとって重大な岐路であることは明瞭である。「言語の本性」という言い方は多分に曖昧であることは承知している。むしろ、言語の獲得はどのようになされるか、言語が行動だとすればこれを制御する規則はどのようなものか、言語能力はどこまで生得的でどこまでが学習により形成されるのか、こうしたさまざまな問いを正確に仕上げ、それぞれの問いを周到に考察することが望ましいばかりか必要なのである。問題にはそれに相応しい遠近法がある。たとえば文法理論の細部を解明するのが問題であるとき、私たちがいまなした設問は曖昧だし場違いだろう。だがここではおおまかな問いの設定で充分である。人間が担った可能性の一つとしての言語が、人間のあらゆる可能性の中でおよそどのような位置を占めるのか。こう問うことによって、セラーズ理論の特異さを見届けるのが私たちの目的である。

セラーズは言語と心の類比を語るとき、もっぱら英語なりドイツ語なりのいわゆる「自然言語」だけを念頭にしている。しかし、たとえば人間の心の働きの最たるものである知覚や認知を語る際に、言語以外の記号系ないし言語以前の記号系(二つを「準言語的記号系」と総称しよう)を視野に入れないやり方は妥当とは思えない。仕草、顔の表情、対象を操作し環境と交渉する身体運動などは、言語ではないものの、すでに意味を孕んだ記号系ないし記号過程である。黙した知覚はそれ自身記号機能として生起する出来事であり、やはり準言語的記号系と見なすことができる。またセラーズが念頭

においている言語にしても、成人の使用する多少とも完成の域に達した言語にすぎず、子どもが学びつつある不完全な言語、しかし成人の言語へと洗練されるはずの「生成しつつある言語」には何の関心も払われていない。これは、セラーズが名づけた「心理学的唯名論」(psychological nominalism)に彼自身が立脚する事実からの当然の帰結である。つまり、彼によれば、あらゆる概念表象は本質的に言語的なものであって、言語獲得以前には論理的空間の意識などありえない[56]。しかし、近年の認知意味論の諸研究が豊富な事例に即して明らかにしつつあるように、概念把握(conceptualization)やカテゴリー把握(categorization)は非言語的な知覚-運動系ですでに営まれているばかりか、その豊かさや複雑さは言語による概念化に優るとも劣らない。セラーズが強調するような言語的概念化の働きは単にその後継者だといっても言い過ぎではない[57]。また認知意味論者の議論よりかなり早い時期に、人間の身体性(embodiment)が意味や合理性の基礎であって、言語は身体性と深く結ばれているという論点は、現象学の見地からメルロ=ポンティが鮮明に打ち出していた[58]。

かつてグッドマンは言語学者が言語以外のあらゆる記号系を無視する弊害に陥っているとして、彼ら(具体的には代表格としてチョムスキー(Chomsky)を指している)の「職業的近視」(vocational myopia)を戒めたが、セラーズもやはりこの批判を免れないだろう[59]。確かに記号系としての言語はある種の特権をもっている。真理を担いうるものは、何よりも言語の文であるし、言語ほど概念的な分節化に向いた記号系はほかにはない。文の離散的構造は論理的な描写に威力を発揮する。動物の中で人間だけが高度な文明を創り出した。この偉業はもっぱら言語の力によると言っても過言ではない。

さりながら、言語はやはり知覚や身体運動の水準に始まる記号機能を継承した、もう一つの記号系にすぎない。チョムスキーは、幼児が四五歳という早い時期に、彼らの自由になるきわめて断片的な言語の素材を手がかりにして、速やかに母語の獲得を完了するという驚くべき事実は、経験主義(とりわけ、行動主義言語学)ではとうてい説明できない、と主張した。代案として彼は、人間の大脳には生得的に言語機能が埋め込まれているという説を提出した。グッドマンはこの説に対して、最初の母語の獲得に先立つ前言語的記号系を考慮するなら、言語獲得をある記号系から別の記号系への移行として無理なく説明できる、という。第二の言語(たとえば、日本人にとっての英語)を獲得するのに重大な制限がないように、母語の獲得に格別の制限はない。それゆえ、グッドマンによれば、「言語機能の生得性」という多分に不明瞭で経験的な裏付けにも乏しい仮設を設けるにはおよばない。この論争にここでにわかに決着を付けるつもりはないが、ただ指摘しておきたいのは、チョムスキーとグッドマンの対立が絶対に調停不可能な種類のものだとは思えないという点である。人間の身体性の水準に生得的な記号能力を認める点でチョムスキーに賛成できるし、言語(母語)が言語以前の記号系から遷移した記号系であって両者につながりがあることを強調する点でグッドマンの主張を是認できるだろう。

類比説はその偏狭な言語中心主義を克服しなくてはならない。そのためには、知覚-運動系を含めた準言語的記号系から言語的記号系への遷移を経験科学とのリエゾンに基づいて闡明することが、哲学的意味論の課題となるはずである。この課題を果たしながら、〈心〉概念の類比に基づく構成をやり直してみなくてはならない。これは私たちがセラーズの背負ったより重い荷物を背負うことを意味する。なぜなら、言語が意味するとはどういうことか、というそれ自体困難な問題に加えて、これからは言語的か非言語的かを問わず、一般に記号系が意味するとはどういうことか、という問題を深く掘り下げることが、心の解明にとって不可欠になるからである[60]。

*(1) 本稿は、菅野盾樹（一九八六）の増補改訂版として執筆された。しかし、許された紙幅の都合でここにはその後半部を掲載する。節および注の番号が途中から始まっているのはそのためである。なお前半部は『人間科学部紀要』（第二六号、二〇〇〇）に掲載される。類比説に関連しては、菅野盾樹（一九九八）も参照していただきたい。また拙論「他者認知としての言語へ」（『現象学年報』第十五号、一九九九）は、この稿の続編の一つをなすものである。

【注】

(28) Chisolm and Sellars (1958, p.527).

(29) Chisolm and Sellars (1958, p.523).

(30) Chisolm and Sellars (1958, p.524).

(31) Chisolm and Sellars (1958, pp.529-530).

(32) Chisolm and Sellars (1958, p.530) を参照。ただしセラーズが例外なしにそうしているといえば言い過ぎである。Chisolm and Sellars (1958, p.524) はこの例外の一つ。

(33) Sellars (1963) ; Chisolm and Sellars (1958, p.523).

(34) Chisolm and Sellars (1958, pp.525-526).

(35) Chisolm and Sellars (1958, p.523f.).

(36) ibid.

(37) Aquila (1977, p.123) ; Rosenthal (1968, pp.120-122, n.1) を参照。

(38) チザムの企ての評価について、菅野盾樹（一九八三、第五章）を見よ。

(39) Chisolm and Sellars (1958, p.524).

(40) Putnam (1981, p.2).

(41) Centore (1979, p.5).

(42) Sartre (1965) を参照。

(43) Sellars (1959/1967, pp.316-317). ローゼンタールはチザムが指同性の「事実上の性格」を顧慮に入れていない点を指摘している。Rosenthal and Sellars (1972,pp.405-406) を参照。

(44) Sellars (1959/1967, p.316, n.14).

(45) チザム側はこの論点を毎回もちだす。たとえば、Chisolm and Sellars (1958, p.525) はその一例である。しかしこれはかえってチザム側に「言語行動」に関する誤解がある証左に他ならない。物音をたてることと言葉を発することが違うのは、腕の上方への運動が〈腕を上げること〉と違うのと同様である。Sellars (1979, ch.5) にこの議論がある。

(46) 意味論における「客観主義」批判については、レイコフ (1993) を見よ。

(47) Sellars (1958) を参照。

(48) Sellars (1963, p.189).

(49) Chisolm and Sellars (1958, p.522).

(50) Chisolm and Sellars (1958, p.536).

(51) セラーズの〈自明性〉と〈非推論性〉を切り離す見地については、次の論文を見よ。Delaney (1976, p.45).

(52) Sellars (1963, pp.167-168).

(53) The letter from Sellars, November 8, 1965. Rosenthal (1968, p.141) に引用されている。

(54) サルトルは、意識が何かについての措定的意識 (la conscience de quelque chose) であると同時に、自己についての非措定的な意識 (la conscience (de) soi) であるとした。意識の自己反射が無限に至るのを避けるためである。

(55) Rosenthal (1968, p.146).

(56) Sellars (1963, p.160).

(57) これは、近年の認知意味論者によって、具体的事例の考察に立って打ち出されている見地である。たとえばジョンソン (一九九一)、レイコフ (一九九三) などを見よ。

(58) メルロ＝ポンティ (一九六七／一九七四) を参照。

(59) Goodman (1978, p.77).

(60) マラスは、セラーズの類比説が採用する方法的行動主義には限界があるとして、言語能力の生得的構造を取り込む形でその狭い理論枠組みを拡張する必要を指摘している。前述のように筆者はこの指摘に賛意をおぼえる。またマラスは筆者と同じように、セラーズが言語以前の記号能力を無視しているのは問題だとしている。そして、もし感覚運動系がすでに記号過程であるなら、感覚印象を非指向的・非概念的なものと見なすセラーズの見解には見込みがないとの指摘も行っている。Marras (1976) を見よ。しかし、最後の点に関して筆者はマラスに同調できない。感覚の問題性に関しては、拙論「感覚、見えるものの外部」(菅野盾樹 (一九九五) 所収) を参照。

【参考文献】

Aquila, R. E.,1977. *Intentionality*, University Park and London: The Pennsylvania State University Press.

Bergman, G., 1972, 'Intentionality' in Marras, A., 1972

Centore, F. F., 1979. *Persons*, Westport: Greenwood Press.

Chisolm, R. M., 1967. 'Rejoinder' in Castañeda, H.-N. (ed.), *Intentionality, Minds and Perception*, Detroit: Wayne State University Press.

Chisolm, R. M., 1972. 'Sentences about Believing' in Marras, A., 1972.

Chisolm, R. M.,1983. 'Believing as an Intentional Concept' in Parret. H. (ed.), *On Believing*, New York: Walter de Gruyter.

Chisolm, R. M. and Sellars, W., 1958. 'The Chisolm-Sellars Correspondence in Intentionality' in Feigl, H. et al.(eds.), *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, vol.II. Minnesota: University of Minnesota Press.

Church, A.,1969. 'On Carnap's Analysis of Statements of Assertion and Belief' in Davis, J.W. et al. (eds.), *Philosophical Logic*, Dordrecht-Holland: D.Reidel.

Delaney, C. F., 1976. 'Basic Propositions, Empiricism and Science,' in Pitt, J. C. (ed.), *The Philosophy of Wilfrid Sellars: Queries and Extentions*, Boston: D. Reidel.

Goodman, N., 1976. *Languages of Art*, Indianapolis: Hackett.

Goodman,N., 1978. 'The Emperor's New Ideas' in Goodman, N., *Problems and Projects*, Indianapolis and New York: The Bobbes-Merrill.

Harman, G.,1987. 'Is There Mental Representation ? ' in *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, Minnesota: University of Minnesota Press.

ジョンソン、M. 一九八六。『心のなかの身体』（菅野盾樹ほか訳）、紀伊國屋書店。

Kripke, S., 1974. 'General Discussion on Sellars' Paper,' *Synthese*, vol.27, no.3/4.

Lakoff, G. and Johnson, M., 1980. *Metaphors We Live By*, Chicago: Chicago University Press. [レイコフ、ジョンソン『レトリックと人生』（渡部昇一ほか訳）、一九八六、大修館　書店。]

レイコフ、G. 一九九三。『認知意味論』（池上嘉彦ほか訳）、紀伊國屋書店。

Loux, M.J., 1977. 'The Mind-Body Problem' in Delaney, C. F. et al. (eds.), *The Synoptic Vision*, Notre Dame: University of Notre Dame Press.

Marras, A.(ed.), 1972. *Intentionality, Mind and Language*, Urbana: University of Illinois Press.

Marras, A.,1972. 'Introduction to Intentionality, Mind and Language ' in Marras, A.(ed.), 1972.

Marras,A.,1976. 'Rules, Meaning and Behavior: Reflections on Sellars' Philosophy of Language' in Pitt, J. C., (ed.), *The Philosophy of Wilfrid Sellars: Queries and Extensions*, Dordrecht: D. Reidel.

メルロ＝ポンティ、M. 一九六七～一九七四。『知覚の現象学』（竹内芳郎ほか訳）二巻、みすず書房。

Putnam, H. et al. 1974. 'Comment on Wilfrid Sellars,' *Synthese*, vol.27, no.34.

Putnam, H., 1981. *Reason, Truth and History*, Cambridge: Cambridge University Press.

レカナティ、F. 一九八二。『ことばの運命』（菅野盾樹訳）、新曜社。

Rosenthal, D. M., 1968. *Intentionality: A Study of the View of Chisolm and Sellars*, A Dissertation (microfilm-xerography).

Rosenthal, D. M. and Sellars, W., 1972. 'The Rosenthal-Sellars Correspondence on Intentionality' in Marras, A., 1972.

Sartre, J.-P., 1965. *La Transcendance de l'ego*, Paris: J. Vrin.

Searle, J.,1969. *Speech Act*, Cambridge: Cambridge University Press. [サール『言語行為』（坂本百大ほか訳）、一九八六、勁草書房。]

Sellars, W., 1958. 'Intentionality and the Mental' in Feigl, H. et al. (eds.), *Concept, Theories, and the Mind-Body Problem*, Minnesota Studies in the Philosophy of Science, vol.II, pp.507-709, Minnesota: University of Minnesota Press.

Sellars, W., 1959/1967.'Notes on Intentionality' in Sellars, W., *Philosophical Perspective*, Springfield: Charles C. Thomas.

Sellars, W., 1963. 'Abstract Entities,' *The Review of Metaphysics*, XVI, 4.

Sellars, W., 1963.'Empiricism and Philosophy of Mind' in Sellars, W.,1963.

Sellars, W., 1963. *Science, Perception and Reality*, London: Routledge & Kegan Paul.

Sellars, W., 1968. *Science and Metaphysics*, London: Routledge & Kegan Paul.

Sellars, W., 1969. 'Language as Thought and as Communication,' *Philosophy and Phenomenological Research*, XXIX, no.4.

Sellars, W.,1974. 'Meaning as Functional Classification,' *Synthese*, vol.27, no.3/4.

Sellars, W.,1974b. 'Reply,' *Synthese*, vol.27, no.3/4.

Sellars, W., 1979. *Naturalism and Ontology*, Reseda: Ridgeview.
Sleigh, R. C.,1967. 'Comments' in Castañeda, H.-N.(ed.), *Intentionality, Minds and Perception*, Detroit: Wayne State University Press.
菅野盾樹、一九八三。『我、ものに遭う』、新曜社。
菅野盾樹、一九八六。「指向性について――「意味」の意味――」、『年報人間科学』、大阪大学人間科学部、一一三-一五一頁。
菅野盾樹、一九八五。『メタファーの記号論』、勁草書房。
菅野盾樹、一九九五。『いのちの遠近法』、新曜社。
菅野盾樹、一九九八。「〈自己〉という隠喩」、『大阪大学人間科学部紀要』、第二四号、二五頁-四四頁。
菅野盾樹、一九九九。「他者認知としての言語へ」、『現象学年報』、第十五号、一三三頁-四一頁。

Mind as the Analogy of Language

Tateki SUGENO

Wilfrid Sellars, a extremely creative and synthetic thinker, is well known especially by his proposing a kind of functionalism in the philosophy of mind relatively early in this century.

The objective of this paper is to reconstruct his functionalism from a critical point of view and to elucidate the merits and problems contained in it.

The functionalism of mind which Sellars intends to construct is in the last analysis based on a functionalistic theory of *meaning*. He takes so-called 'mental state,' which he himself calls 'thought,' as analogue of speech, which ought to be introduced as one type of theoretical entity into theoretical discourse about human behaviors including speech in order to explain them theoretically.

It is clear that whether Sellars' analogy theory of mind is valid or not depends on finally the presumed validity of his functionalistic theory of meaning. The author concentrates on the problem of the validity of Sellars' functionalistic theory of mind and come to a conclusion that the theory has not any fatal defects.

Though the theory has a number of theoretical merits—to give just an example, demysitification of intentionality—the author insists, Sellars' notion of language should be totally renewed from a philosophical standpoint of human embodiment.

Key Words

intentionality, Wilfrid Sellars, the analogy theory of mind, functionalism, philosophy of mind